図書館友の会 ニュース

2025年
7月号
No. 35

発行　岸和田市図書館友の会　《発行責任者　杉原　富人》

「図書館友の会」定期総会を開催

図書館友の会は6月12日に総会を開き、2024年度の事業報告・会計報告及び2025年度の事業計画案・会計予算案が承認されました。

総会後は例年、演芸や時流に即した講演等が催されていましたが、今年度は「友の会」6教室の紹介・発表と交流会を開催。各教室から10分程発表・報告しました。

「それぞれの教室が趣向を凝らして紹介してくれた」「楽しく興味を持って聞くことができた」など好評でした。

各教室の学びの目的や意欲、意気込みなどを感じた

今まで、各教室の勉強会等の内容は市の広報で会員募集時に要項等で知る程度で、各教室生の生(なま)の声を聞く機会がありませんでした。今回、各教室の教室生による紹介に、総意工夫、趣向が感じられ、教室生の学びの目的・意欲・意気込み、教室への愛情等も感じました。また教室の勉強の奥深さも同時に知る事が出来、教室間の学びの刺激にもなったような気がします。

世の中の表面的な価値観がどんどん変わっていく昨今、参加者の中で、心に思う教室があれば、思い切って参加することにより、また自分の思いと違った自分に会え、友達も出来、大切な事を学べるような企画でした。　**（短歌教室　皆見　眞砂子）**

弥生時代から古墳時代へ－鉄器･青銅器からみた畿内における政治権力形成－

６月１４日（土）　八木市民センターで開催

参加者の感想①　　西林　茂樹

今回の講演で銅鐸の「埋納」の話に大変興味を持ちました。銅鐸と言えば、時の権力者の権威の象徴として大切にされた祭器だと漠然と思っていました。「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」があり祭祀のあり方も異なっていて，特に「見る銅鐸」は近畿で巨大化したのに，集落から外れた丘陵に埋納された。埋納には保管説，隠匿説，地鎮説等があるそうですが、最終的には「捨てられた」形で銅鐸は終焉を迎え、銅鏡に取って代わったとのことでした。これは私には新しい知見でした。弥生後期の畿内（近畿中部）は銅鐸の授受を通じて鉄器化は進行していたが、まだ低い鍛冶技術であったとのことから，やはり「銅鏡と鉄器を持った新しい勢力」が畿内に進出してきた時に前世の権力者を象徴する祭器の銅鐸を「捨てた」のではと考えてしまいました。

今回の講演も情報量が多く内容も難しかったですが、転換期を迎えつつある弥生後期の畿内の話は大変興味深かったです。

参加者の感想②　　小西　研三

まずは鉄器について、最初は農耕具、その後は武器として、石器に代わる極めて重要なものであり、弥生時代のいずれかの時期に朝鮮半島から輸入され始めたのですが、最初九州に伝わってから、どのような経緯で畿内にまで普及していったのか、（素材の性質上）遺物の少ない中、考古学的視点

で概観されました。

次に、弥生時代の代表的な青銅器祭器である銅鐸について、九州から中部地方に至るまでの分布や、「鳴らす」銅鐸から「見せる」銅鐸への変遷、さらには破壊されたり埋納されたりして終焉を迎えるまでの状況について、上位階層墓の存在・非存在と関連づけながら詳細に説明されました。いずれもこれまでぼんやりとした知識しかなかった問題で、改めて当時の時代の動きがより正確に理解できるようになりました。

詩の教室　公開講座　　「詩をあなたの声で読んでみよう」

５月１８日（日）開催

例年なら爽やかな初夏の候。今年は天候不順で体調を崩す人もおり、教室生は８名しか参加できず総数１４名で会を催行しました。今回は、自分の好きな詩や歌を朗読し、それぞれが、なぜこの詩を選んだのか、どういうところが気にいっているとか、人生のどんな時点でこの詩に出会い、どんな思いをもっているのか等、熱く語り合えました。朗読された詩を紹介します。カール・ブッセ「山のあなた」ブラウニング「春の朝」ヘルマン・ヘッセ「霧の中」作詞アマンダ・マクブルーム、歌ベット・ミドラー「ローズ」伊藤新吉「略歴」黒田三郎「僕はまるでちがって」萩原朔太郎「感謝」坂村真民「二度とない人生だから」まどみちお「ぞうさん」「するめ」宮沢賢治「雨にも負けず」自作詩「ムーンライト・ダンス」「空色の猫」。日曜日開催なので、学生や若い方の参加も期待したのですが、（２０代？の方も１人おられましたが）少し寂しい集まりで残念でした。が、アンケートでは詩の教室に参加したい、詳しい話を聞きたいとの嬉しい回答もありました。

参加者の感想　　広い分野の詩に触れることができた朗読会　　山中従子

公開講座の内容は次のようなものでした。

・日本における短歌から現代詩につながる歴史や日本独特の五、七調のリズムと文語調の特色。
・ソネット形式などのヨーロッパ文学と日本文学との違い
・訳者で雰囲気が変わる翻訳の大切さ
・戦中戦後の時代背景、個を大切にして組織を嫌う生き方、現代詩はなんでもありだが今こそ詩に対する心構えの必要性を感じる時代だ。
・日本の昔の文には句点や句読点がなかった。句点句読点がなくても読める読み手の能力が高い日本人の歴史があった。
・私達は詩を書く時は内容から入ることが多いがリズムから入っている詩にも注目した。明治時代からの学校で教えた唱歌による影響力について。
・戦後の現代詩における荒地の詩のグループの役割に触れ、生活感のある詩とは。
・詩作には最初に書いたモチーフを大事に自分の発した言葉に誘われて書き進めていくことが大事。
・萩原朔太郎詩集の第三巻には少し難しい文語体の詩もでてくるが一巻や二巻も自由に読んだらいい。
・イメージや言葉で遊ぶ詩作の大切さ。
・宮沢賢治の雨ニモマケズは手帳の中に書かれていたものがのち発見された。宮沢賢治の生い立ちなど。
・参加者からは各自持参した詩の朗読とその理由の発表、その他に戦没者への政府としての責任問題、脚本を書くために詩を読んでいる、時間を有効に使おうと思いこの講座に参加したという話がありました。

各自がそれぞれ持参した大切にしている詩は、例会である詩の教室での作品の、原点になっているものかと思われた。それと聴衆を前にして声に出して読んでみると、詩そのものが、書いた

本人からも読み手からも離れていって、作品そのものが独自の趣をもってくるようだと感じました。詩の教室の講師でいらっしゃる倉橋先生は、それぞれの異なる分野の詩に素早く鋭い適格なコメントをくださり、午後からの短時間でしたが、とても充実した時間になり、詩に対する視野が広く深くなりました。

歴史カフェ　日本人の起源　― 古代 DNA 解析の結果から ―

４月 27 日、八木市民センターで開催

「日本人はどこから来たのか？」「　弥生人とは何者か？」杉原富人氏が古代 DNA の解析結果を基に、これらの問題に関する最近の研究成果も含めて知見を紹介。その後、出席者の皆さまと本テーマに関して意見交換しました。

「古代 DNA 解析の有用性を説明して、現在の人種と古代人との比較は、大きなロマンのあるお話と思いました。」「古代史を科学的な根拠から捉えていく、このことに興味を惹かれる。」などの意見が寄せられました。

●次回は「人類の起源」に関して話題提供する予定です。

参加者の感想①　　梶野昭太郎

２０２５年５月１１日、「日本人の起源－古代ＤＮＡ解析の結果」というタイトルに魅かれて八木市民センターで開催された歴史カフェ参加しました。

話題提供者杉原富人会長のお話は瞠目するものでした。私はミトコンドリアＤＮＡ分析の本を読んでいました。母方の遺伝子情報が代々引き継がれる、ホモ・サピエンスは遡るとたった一人のイブにたどり着くとありました。

「次世代シークエンサー（ＤＮＡの配列を読み取る機械）」の実用化により、古人骨の核ＤＮＡから遺伝子情報とりだせる様になり格段の進歩を遂げたようです。スパンテ・ペーボ博士がこの機械を駆使し、絶滅した人類の遺伝子情報を解析する方法を確立し、母方の遺伝情報だけでなく父方の遺伝子情報も解るようになった。同博士はこれでノーベル賞を受賞した。これから先の研究成果が楽しみだ。次回も必ず参加したいです。

参加者の感想②　　林　与一

今回の歴史カフェは、目から鱗が落ちました。講師は、図書館友の会会長でコラーゲンペプチドの研究者で学位保持者でした。いきなり、杉原氏の思惑通り、

問題の所在：「日本の始まりの謎を科学的に解き明かすこと」から、結論：「古代 DNA 解析による人類の起源：」「ヤポネシアへの三段階渡来モデル」・・「古代 DNA 解析とスバンテ・ペーボ氏：」「ネアンデルタール人の DNA 解読：」「デニソワ人の DNA 解読：」「核ゲノム分析のポイントと出土人骨の正体：」「パレオゲノミクスで解明された日本人の三重構造」「三重構造モデルの提起：」「全ゲノム解析で明らかになる日本人の遺伝的起源と特徴：」－ネアンデルタール人・デニソワ人の遺伝子混入と自然選択―へと進みました。

これらの研究によって、日本人の祖先に関わる三つの源流（縄文系・関西系・東北系祖先）が明らかになり、また、現生人類から最も近縁の「ネアンデルタール人やデニソワ人」から受け継いだ遺伝子領域が特定された。一部の日本人が持つ 2 型糖尿病リスクと関連しているとのことには、ほんと、びっくり。

ありがたいことに、午前 11 時から質疑応答および各自の自己紹介がありました。市内だけではなく、市外からの聴講生も複数名来られていました。

杉原氏がおっしゃっていたように多くの方は、僕と同じように古代 DNA 解析結果から日本人の起源が理解できたこと、および本研究は、日本におけるマイルストーン（里標石）として、病気の原因となる遺伝要因の解明に発展していくことが望ましいなあ。僕は、なんでも知りたがる性格ゆえか、今回の聴講で、旧人（ネアンデルタール人やデニソワ人）の特徴として、科学の解明によってある程度は解明されていることに関連し、さらに、現代人との対比で、①体格の違い②性格はどうなのか　③素質・能力などの変化や推移も知りたくなりました。加えて、最近言われているような「親ガチャ」と「DNA」との関係性も知りたくなりました。また、質疑応答では、レイシズム問題まで危惧する聴講生もいました。

最後になりましたが、今回の歴史カフェ「日本人の起源」講義により、学ぶ楽しさ・ボケ防止に役立ち・想像力を養う力を与えてくれた杉原氏に感謝です。次回もよろしくお願いします。

地名の秘密　㉝　一口(いもあらい)再考

京の地名一口（いもあらい）の多様な語源説（１）

京都の地名「一口」「先斗町」「間人」などは、難読地名としてよく知られており、難読であるが故にかえって多くの人が読めるという、不思議な逆転現象が起こっている。特に一口(いもあらい)＝京都府久世郡久御山町については、私も 2017 年 10 月号友の会ニュース「地名の秘密③一口（いもあらい）」として取り上げた。

特に一口（いもあらい）については多くの地名関係書で採り上げられ、殆どの書で「いもあらい＝疱瘡（いも・ほうそう）除け」説が紹介されている。最近京都の一口は「疱瘡除け」とは全く関係のない地名であるという説が出ている。今は干拓が完了しているが、巨椋池(おぐらいけ)という大きな池があり、『万葉集』にも「巨椋の入江」として登場し、近世には「大池」と称された。かつては宇治川・木津川・桂川が注ぎ込む大池であり、集まった水は淀川として流れ出て行った。大水の時には池面域も拡大する遊水池的な役割もあり、多くの水害をもたらせた池でもあった。

Ａ　昔三方は沼で一方より入口がなかったので一口とつけられた。

Ｂ　用明天皇が一口川に流した短冊を淀の漁師が引き上げ、禁裏へ届けたところ「一口」の名を賜ったことによる。

Ｃ　秀吉が宇治川に流した短冊を大鯉が一口で飲み込んだという伝承による。

Ｄ　弘法大師が農夫に「何を洗っているのか」と聞くと、農夫は「芋だ」と答えて、その芋（里芋や小芋のこと）をひとくちで口へ入れたという伝承による。

Ｅ　巨椋池に大小無数の島州がありまるで「芋を洗う」かの景観であったことによる

Ｆ　巨椋池から献上した鯉に「一咫鯉一尾」として目録がつけられたが、この咫を口と読み違えたことによる。

Ｇ農夫が初めて土地を耕す時、その土地の一部を柱で囲み、神から貰う祭事を行った。これを「地貰い（じもらい）」と言い、それが転化したことによる。

Ｈ「一」は土地を表し、「口（＝しかく）」は土地の区域を示すことによる。

地名の由来は面白いので、次回も書く。

参考資料　『地名と風土⒄』「特集地名研究の原点を京都で探る」

【文責】　　文章教室　浦田榮二

☆ 今年の「文学歴史散歩（バスツアー）」は 11 月 14 日（金）

訪問先：高槻市の今城塚古代歴史館・今城塚古墳公園（埴輪祭祀場および古墳）